

平成26年度第1回宮崎県社会教育委員会 議事録

期日：平成26年6月2日（月）

午後3時～5時

会場：県庁4号館 共用会議室

質疑応答 みやざきの次代を担う「青年の人材育成プロジェクト」について
地域ぐるみの「子育て・親育ち」応援事業について

議長 これまでの説明の中で質問等はありませんか。
まず、みやざきの次代を担う「青年の人材育成プロジェクト」事業についての質問は、ありませんか。

委員 地域婦人連絡協議会は、青年団協議会と50年来の活動を共にさせてもらっているが、地域の中で、男性は青年団、女性は婦人会に入るのが当たり前という時代もあった。現在は、北方領土返還要求宮崎県民会議の中で連携しており、全国的に広がりのある活動をしている。

これからも、地域婦人連絡協議会は、青年団を応援したい。

委員 青年結集会議のメンバーは、どのようにして選んだのか。

事務局 県青年団協議会だけではなく、SAPや商工会議所、青年会議所など県内の各青年団体に声をかけたが、地域づくりの活動を顕著に行っている方、やる気やパワーのあるいわゆるキーパーソンに委員になっていただいている。今後は、委員が増えることも考えられる。

議長 地域ぐるみの「子育て・親育ち」応援事業は、今後どのように進むのか。

事務局 3年計画の事業である。ただし、子どもの生活習慣づくり運動のモデル地区は、県内7地域で1年の指定であり、3年まで継続できる。家庭教育サポートプログラムについては、養成したトレーナーが各教育事務所単位で実施するトレーナー養成講座の講師を務めることになる。また、本事業は青少年県民育成会議と連携して取り組む事業であり、できる限り「家庭の日」の趣旨を生かして取り組んでいきたいと考える。

委員 このプログラムを見ると、どちらかというと親向けのプログラムが中心となっているような印象があるので、趣旨から考えるともっと親を支える地域のプログラムとして活用するとよいと思う。「家庭が、がんばれ」ではない画期的な取組だと考える。



事務局 このプログラムは、地域の関わり合いの観点から作成されているもので、全体の中で地域が関わる部分の比率は少ないが、地域ぐるみで取り組むのがその趣旨である。今後は、プログラム推進の進捗状況を見ながら、途中でプログラムを増やしていくなど、可能な範囲で柔軟に考えていきたい。

議 長 この事業は学校主体で進めるのか。受け皿はどうなるのか。

事務局 7モデル地区は、実態に応じて受け皿は様々である。公民館やPTA、いわゆる「おやじの会」もあり、学校主体ではない。活動も様々である。



委 員 「地域ぐるみ」が事業の目標であるが、どうしても現役の保護者が中心となるように思う。都城のラジオ体操の実態を調査したら、小さな地域でも行われているが、地域住民の参加がほとんどなく、お世話役は現役の保護者のみである。期間は、夏休みの最初と最後の1週間程度である。近隣の公園などでランニングやラジオ体操をしている地域住民はいる。この人たちを子どもたちの夏休みラジオ体操に取り込めないものか。モデル地区では、地域住民の参加に力を入れる取組が必要であると思う。

事務局 モデル地区の一つである小林市立紙屋小学校区は、校区内の自治公民館に受けていただいている。この地区は、夏休み期間中は毎日、雨天時も欠かさず、公民館で地域住民が主体となってラジオ体操に取り組んでいるようである。今後は、このような地域ぐるみの活動を「家庭の日」の取組と併せて広報し、広めていくことが大切である。

委 員 この事業は、子どもを育てることが困難な家庭を地域で育てることができる魅力的なプログラムであると考えます。そこで、子ども会、婦人会や高齢者、自治会などをとおして、地域の方をまきこんでトレーナーを養成していくと、地域で家庭を支えることにつながると考える。

事務局 家庭教育プログラムを条例化するなど、九州内でも県をあげて家庭教育支援に取り組んでいるところがある。本県においては、チーフトレーナーやトレーナーの養成に全力で取り組んでいるところであり、県をあげて家庭教育支援が行われる機運を高めていくことが重要であると考えます。

委 員 家庭教育学級は、システムができているので、保護者は、プログラムに取り組みやすいと思うが、一番重要なのは、地域住民にどのように情報発信していくかである。自治公民館には、教育・文化などの部会もあるので、トレーナーがどこにいるかなどがその人たちにわかれば、地域でも取り組みやすくなると思う。

委 員 このプログラムを社会教育の現場にどのように広めていくかが重要である。県が関わってい

る様々なネットワークや組織に投げかけていけば、あっという間にもれなく広まっていく。

いろいろな施策をばらばらではなく、このプログラムをベースにすると、あらゆるところとつながり、普及できると考える。

委 員 この事業は、学校中心の事業なのか。チーフトレーナーは、どのような方々か。

事務局 チーフトレーナーの方々は、現職の学校の先生は一人もいない。農業に従事されている方や自営をされている方、社会教育指導員の方など様々である。

委 員 親子生き生きカレンダーの内容はどんなものか。なぜ小学1年生だけの配布なのか。

事務局 早寝早起き朝ごはん、あいさつ、お手伝いに関することをカレンダー形式で、できた項目をチェックする内容を考えている。予算の関係で小学1年生だけの配布であるが、インターネットからダウンロードできるようにするので、他学年にも活用してもらいたい。

委 員 小学3年生で習い事をたくさんしており、寝るのが遅い実態もあるので、一日のスケジュールについても内容に入れてほしい。

委 員 「家庭の日」と併せた取組がいいと思う。特に、最近は「家庭の日」といってもなかなか親子でふれあう時間がとれないことが多く、「家庭の日」をいわゆる「地域の日」と広く解釈し、地域でふれあうことが大事ではないかと考える。

議 長 本事業については、今後の会議の中でも進捗状況を聞きながら、意見をいただきたい。

協議テーマ 「みやざきが誇れる青年の人材育成」について

議 長 本年度のテーマであります「みやざきが誇れる青年の人材育成」について協議したい。宮崎の青年の人材育成をどのように行えばよいか、各委員の立場からいろいろな意見をお願いしたいと考える。

委 員 宮崎県地域づくりネットワーク協議会は、総務省を中心に全国的に展開していたものであるが、6～7年前から低迷しているようである。本県は、県内を8ブロックに分け、そのブロック内にある様々な青年団体に声をかけ、取り組んでいることで、本県が一番元気に活動を行っていると考ええる。本事業を1年で終わらせないためには、県全体では広いので、ブロック単位で行い、市町村に問い合わせ、青年団だけではなく、青年団体を含めた組織に声をかけ、取り組むとよいのではないかと考える。ネットワークを使いながら活動して



いけば青年の活力を引き出すことができるのではないか。

委 員 県青年団協議会は、「人材育成」と「地域づくり」を活動の柱としている。県や全国のスポーツ大会に参加すればいいという人もいるが、そういう大会に出るまでの過程で青年が成長するしくみをつくることを重視したい。また、自ら考えて、行動する力がないことを改めて感じることが多々ある。基本的な報告、連絡、相談もできていない面もある。

また、青年結集会議のメンバーを見ると、たくさんの組織がある中で、職業の延長で集まりやすい面があり、目的が一つになりやすいと思う。その意味では、青年団協議会は、活動そのものがボランティアであり、多種多様な職種や考えをもっているのも、まとめるのが難しいと思う。地域の青年には、活動のパワーはあると思うが、活動のメリットがないと青年団になかなか入らない難しい現状がある。

事務局 この事業の目的は、「地域づくり」ではなく「人材育成」である。職域を超えた青年の皆様が集まっていただき、宮崎で何ができるかを考えてもらい、社会教育の視点で形としてフォーラムを実施することによりリーダーの育成を図るものである。

委 員 県青年団協議会は、軸になる人が必要であると思う。活動の中でそのような人をどう呼び込んでいるかを教えてほしい。人の情報がない中で、活動にどのように呼び込むか、活動している中で、こんなことをやっているんだということがあれば、今後のキーワードになることだと考える。

委 員 メールや電話ではなく、フェイス to フェイスで活動に誘っている。イベントをする際に誘うことが多いが、活動を通した時間の共有を図ることで楽しさを味わってもらいたいと考えている。自分自身の成長や刺激を求めて活動に参加するよりも友達をたくさんつくることを目的に参加する方が多い。

議 長 出会いが多いのが青春時代である。いかに出会いをつくることが大事な視点にあると思う。そこにいろいろな考え方が生まれ、地域との兼ね合いができる。最近は、優秀な青年は多いが、全体的な出会いが少ないと思う。

企業に勤めている青年に対して、何か意見があればお願いしたい。

委 員 自分にメリットがないと動かない、前に出ようとしな
いことは、仕事上も感じる場所である。人は一人では成長できないと思うので、出会いの数ほどチャンスが生まれると思う。若い人の思考で特徴的なのは、例えば進路選択する上で、目の前にあることにどういう情熱をもって取り組むかではなくて、他の人の経験を問うてから決めることが多い気がする。

若い人の思考が変わってきているので、そのチャンネルをつかんで、発信源をつくってあげなければいけないのではないかと考える。



委 員 最近の新聞に、今の若者は、社会貢献したいが、どうやったらそれが実現できるのか、その方法がわからない人が多いということが出ていた。中学・高校にボランティア部があるところも増えている。例えば、スポーツ大会においてもボランティア募集の情報を学生たちにもっと情報発信していけば、つながりができるのではないかな。

主催者側としても、各ボランティアが何を求め参加し、何に満足するのかを考えることが必要である。

委 員 本校の生徒は、百数十人が青島太平洋マラソンのボランティアや若草通り活性化事業や楠並木の朝市の参加など地域に溶け込んだ活動に参加しているなど、高校生がボランティアをする意識は高い。社会貢献する気持ちも大きいですが、その気持ちをどう吸い上げるかが大切である。高校生から青年へのつながりをどうするかである。実業系高校の使命は、地域の人材の育成と地域文化の伝承であると考えている。

議 長 話が深まってきたところですが、時間が来ましたので、後は次回の会議でお願いしたい。ここで、副議長にまとめをお願いしたい。

副議長 たくさん意見が出たので、本日出た意見を挙げていきたい。地域ぐるみの「子育て・親育ち」応援事業については、まず、地域の人を巻き込む活動であるということである。個別の家庭の問題ではなく、地域全体の問題として、個別性から全体性へという視点が大事かということであったと考える。

次に、事業をいかに継続できるかという意見もあった。そのためには、情報発信が必要だということである。三番目は、事業の具体化をどうするかということである。そのためには、いろいろな組織を取り込んでやっていくことが大切だと考える。

「青年の人材育成プロジェクト」事業では、ネットワーク化し、プラットフォームをいかに継続していくか、ゆるやかなネットワークをどう形成し、どう機能させるかという意見があった。次に、この事業自体は、社会教育の中の人材育成であるということ話もあった。事業としてやっていくべきこととしては、対面的な活動の場、出会いの場をつくることが青年や地域の活性化につながるということである。人と会って何かしたいという気持ちが生まれるのではないかということを言われる先生もいる。情報発信、あるいは参加する人の意欲を取り込んでいく場、受け皿づくりの議論もあった。高校生の世代からの取り込みの可能性の意見も出た。

議 長 ありがとうございました。以上で本日の会議を終了としたい。



(終)